

ワークショップ2

シーフテストの必要性について —献血者アンケートから見えるもの—

山口和子, 山尾美智代, 戸松夏子, 鈴木景子, 河野千寿子, 杉本彩由美, 中野義枝,
浅井美幸, 川上由加利, 濱口恵子, 田爪珠子, 稲葉和弘, 北折健次郎, 大西一功
(愛知県赤十字血液センター)

【はじめに】

愛知県赤十字血液センターではシーフテストを導入してから4年が経過した。今回、当日に陽性症状の申告はなかったが、献血が誘因となり手根管症候群の診断を受けた神経障害の事例を通じてシーフテストの重要性を再認識した。

そこで、「シーフテスト」について、改めて実施状況を確認するとともに現状を把握し効果的な方法を実践するために献血者にアンケートを行った。

【シーフテストについて】

シーフテストは上肢に潜在的な異常がないかどうかを調べるテストである。あくまで本日の腕の健康状態をチェックするものである。

方法は脇の下を直角にして肘を上げ、手首を60度に曲げ、上肢を外旋外転拳上90度で肘を最大屈曲位にし、手首の屈曲60度で30秒間続ける。

この肢位により、上肢の神経が圧迫され、腕や指の痛み、しびれや、肩から腕にかけてじんじん

した痛みやだるさが出現するか調べる(図1)。

普段の日常生活の中で重労働や激しい運動、育児などの腕を酷使されている人の中には潜在的な神経障害の方がいる。

献血時に針を刺したことがきっかけになり、今まで隠れていた障害が前面に出てくるという総和神経障害があることがわかつってきた。そのため、その危険性を事前に献血者に知らせる必要がある。それが「シーフテスト」である。

献血者にはシーフテストの内容についての掲示物を提示し、ホームページでも掲載している。

【シーフテストの実施状況について】

当センターではシーフテストを受付の段階で実施している。献血者受け入れの際の同意確認と同時にシーフテストについて説明している。30秒間のシーフテストは受付業務に支障なく懸念された献血者のクレームもなく実施できている。スタッフの混乱もない。

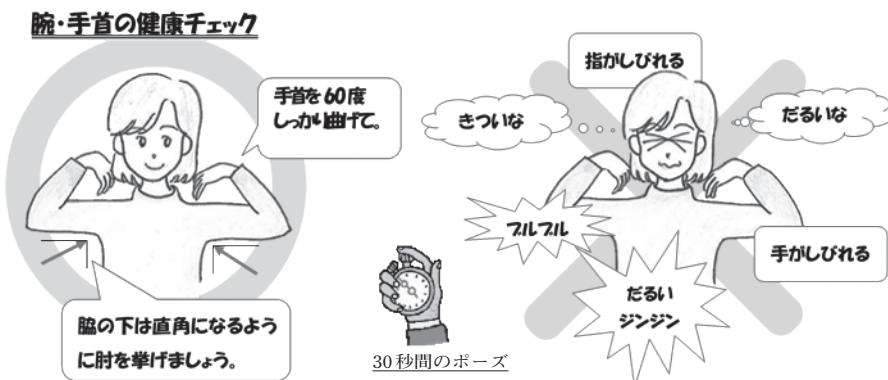


図1

受付のあと、検診医師の診察にはいり、シーフテスト陽性者には、ご本人の上肢に何らかの障害が現段階で潜在的に存在することを説明し、献血者に了解のもと献血の実施またはご辞退を選択していただく。

次に採血前検査にうつり、腕の症状、血管、神経の走行を考え、慎重に血管を選定しシーフテスト結果の最終確認を行う。

【シーフテストの導入後の採血状況の変化】

シーフテストを行うことで、看護師が採血副作用に対する漠然とした不安から解消され、痛みやしびれに関する軽微な採血副作用でも献血者健康被害記録を作成し、初期対応が充実した。これらが、献血者の安全確保につながり一人でも少ない採血副作用を目指す流れに変化した。また、専門医への誘導と正しい診断を受けることで因果関係があるものとないものが明確に分けることができるようになった。

【アンケートについて】

アンケート結果は(図2)の通り。

【結果および考察】

シーフテストの認知度は62%であり、4年間継続している割には知られておらず、受付の一連の流れの一部として行われていることが分かった。ただ「シーフテストをお願いします」と声かけしただけで、テストの姿勢をとっていただける献血者や、受付開始と同時に自らタイマーを押してシーフテストを開始する献血者もいて理解は次第に広がった。抵抗感に関しては、98%がシーフテストに抵抗がないと答えていて大多数が抵抗を感じていない。また、96%とほとんどの献血者が協力的であることが分かり、シーフテストは献血者に受け入れられていることが明らかになった。

ただ、4割弱の献血者が目的を理解せずシーフテストを行い、2割が正しい方法を理解していない状況が分かった。年数を経過しシーフテストは

習慣化され、流れ作業的に行われている現状がわかつた。またごく少数の0.7%がしびれや痛みを少しがまんして申告していない。こうした献血者にシーフテストの目的を正しく理解していただくためにも、内容について献血者に事前告知を徹底していくことが課題である。また、具体的に陽性症状の内容について、職員間や献血者に理解を深める必要がある。

調査期間中、目的や方法を理解していない献血者に説明を行った。シーフテストをするのはなぜかを重点的に、穿刺をきっかけとして強い痛みやしびれが出現する可能性があることについて説明した。中には上肢の潜在的な病態を持つ方がいて、手根管症候群、肘部管症候群などの上肢の疾患があることを説明した。本来の目的、方法を知り、聞いて良かった、参考になったという献血者がほとんどで、シーフテストに対して理解が得られた。

スタッフ間の再教育や、献血者への説明を通して、看護師の知識、技術の向上につながり、慎重で正確な採血を行う意識付けとなった。

【まとめ】

当センターではシーフテストは受付の流れの中で実施可能であり、献血者の受け入れに影響はなく、献血者の苦情はほとんど発生していない。

シーフテスト導入により採血状況に大きな変化が見られ、献血者の安全を守る方向へと進んだ。

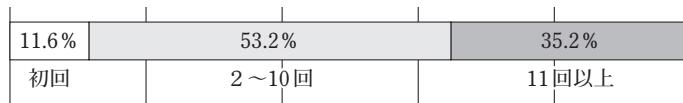
穿刺をきっかけとして起こった痛みやしびれに対して根本治療に結びつき、医療機関受診フォローや一日数や受診回数が著しく減少した。

シーフテストは年数が経過し浸透しているものの、習慣化され、流れ作業的になっている現状が分かった。

献血者がシーフテストの目的・方法を正しく理解するためにシーフテストの内容について、事前告知を徹底することが課題である。

一人でも少ない採血副作用を目指し、リスクマネジメントの態勢を整えていくことが、シーフテストを色あせぬまま継承していく上で重要である。

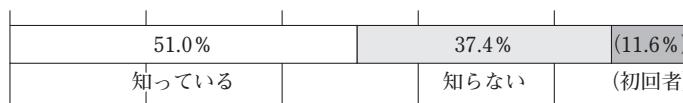
①「シーフテスト」を実施したのは今回を含めて何回目ですか？



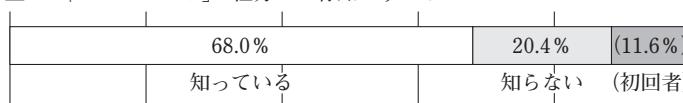
②「シーフテスト」という言葉を聞いたこと、または聞き覚えがありますか？



③なぜ「シーフテスト」を実施しているかご存知ですか？



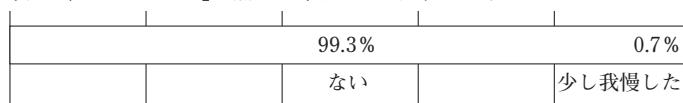
④正しい「シーフテスト」の仕方はご存知ですか？



⑤「シーフテスト」を実施することに抵抗はありませんでしたか？



⑥今回の「シーフテスト」で痛み・痺れなどの症状はありませんでしたか？



⑦今後も「シーフテスト」にご協力お願いできますか？

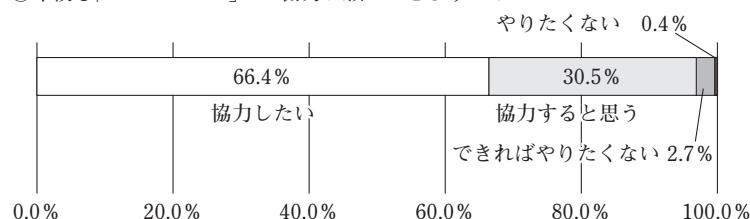


図2